

研究の広場：パトリシア・マジュイ監督『サン＝シール』

畠山 香奈

フランソワーズ・ドービニエ（Françoise d'Aubigné, 1635-1719）の生涯は、真実らしさに欠けていると言えるかもしれない。詩人アグリッパ・ドービニエを祖父に持ちながらも、物乞いをするほど貧しい幼少期を過ごしたフランソワーズ・ドービニエは、詩人ポール・スカロンと結婚し、ルイ 14 世の寵姫モンテスパン夫人の子供の養育係に任命され、最終的にはルイ 14 世の妻の位にまで登り詰める。にわかには信じがたいマントノン夫人——フランソワーズ・ドービニエは 1674 年にマントノンの土地と城館を入手し、マントノン夫人と呼ばれるようになる——のシンデレラストーリーは、今もおおくの人の関心を引きつけてやまない。2019 年にマントノン夫人没後 300 年を記念する展覧会がヴェルサイユ宮殿で開催されたことは、その裏付けだと言えるだろう。

綿密な文献調査に基づいて書かれたフランソワーズ・シャンデルナゴールの『無冠の王妃マントノン夫人 ルイ 14 世正室の回想』（二宮フサ訳、中公文庫、2007 年）は、マントノン夫人の生涯を知るうえで貴重な資料のひとつであり、1996 年にはニナ・コンパネーズ監督のもと映画化されている。4 時間超の長編映画『ルイ 14 世の秘密の王妃 ～マダム・ド・マントノン～』で描かれるマントノン夫人とモンテスパン夫人の確執は大奥を彷彿とさせるものがあり、つい見入ってしまう。その一方で、映画のなかでサン＝シール女学院をめぐる出来事は、マントノン夫人の成功を象徴するエピソードとしてしか言及されていない。

サン＝シール女学院の生徒たちに理想の教育を授けるため、マントノン夫人は当代随一の劇詩人ジャン・ラシーヌに学校劇の創作を依頼する。こうして生まれた聖書劇『エステル』は、1689 年にサン＝シール女学院の生徒たちに上演され、大成功を収めた⁽¹⁾。この成功を受けて、ラシーヌは、同じく聖書に取材した『アタリー』の執筆に着手するものの、『アタリー』が『エステル』と同じ形で上演されることはなかった。ダヴィデの子孫を滅ぼそうとする悪人アタリーが、ラシーヌの『アタリー』では悲劇的な登場人物として描かれているからではない。ラファイエット夫人が記録しているように、サン＝シール女学院の生徒による『エステル』の上演が予想以上に波紋を呼んだからである⁽²⁾。この顛末を鮮やかに描いているという意味で、2000 年に公開されたパトリシア・マジュイ監督『サン＝シール』（原作イヴ・デンジャーフィールド『エステル館』）は興味深い。映画『サン＝シール』では、マントノン夫人による女子教育のもたらした影響がふたりの生徒の葛藤をとおして描かれる。本稿では映画『サン＝シール』の見どころをいくつかご紹介したい。

* * * * *

サン＝シール女学院とは

サン＝シール女学院は、戦死した父親をもつ没落貴族の子女やカトリックに改宗したばかりの子女およそ250人を迎え入れ、教育することを目的として創設されたフランス初の王立の女学校である。当時、女子教育を担っていたのはおもに修道院であるが、その内容は教理問答や読み書き、そろばんといった家庭内で求められる初歩的なものに限られていた⁽³⁾。女子にも雄弁術や文学・歴史的な知識が必要だと考えていたマントノン夫人は、修道院の教育とは一線を画す革新的な女子教育を実践し、自身の考える理想的な女性を育成するという野心的な試みをサン＝シール女学院をもって実行に移したのだった。

映画『サン＝シール』は、泥まみれの娘たちがサン＝シール女学院に到着する場面から始まる。一同に会した生徒たちにマントノン夫人が自己紹介をするよう求めると、生徒たちはそれぞれ慇懃に応じるが、マントノン夫人は生徒たちの言っていることがまったく分からない。ひどい訛りがあるからである。ラシーヌは『エステル』の序文のなかで、暗唱や朗誦は生徒たちがフランス各地で身につけた訛りを矯正するのに効果的だと述べているが⁽⁴⁾、それはこのことかと納得する場面である。

ノルマンディー地方のピユールからやってきたリュシー・ド・フォントネルは、言葉も習慣も異なるサン＝シール女学院に連れてこられて、心細さのあまり何度となく脱走を試みる。そんなリュシーにウルスラ会の修道女ブリノン先生は、「フランス語をちゃんと勉強しないと、新しいお友達もできないし、これまでのお友達もなくなってしまいますよ」と手厳しい。そんななか、リュシーは同郷のアンヌ・ド・グランカンと出会い、打ち解ける。このふたりが『サン＝シール』の主人公である。

『エステル』の誕生

ところで、ラシーヌの『エステル』に関連する文献にあたっていると、前述のブリノン先生の名前を度々目にするようになる。イエズス会の学校に倣って、マントノン夫人はサン＝シール女学院でも演劇を教育の一環として取り入れようと考えていて、しばらくは校長のブリノン先生に劇を作ってもらっていた。しかし、その学校劇の出来栄が思わしくないため、最終的にコルネイユやラシーヌの作品を扱うことになったという件がその一例だ⁽⁵⁾。映画『サン＝シール』では、リュシーとアンヌがラシーヌ作『イフィジェニー』の第2幕5場——エリフィールがイフィジェニーの恋人アシルと恋仲にあるという偽の情報を信じて、イフィジェニーがエリフィールを詰問する場面——を熱演し、マントノン夫人はその圧巻の演技に危機感を覚えるという一幕が描かれる。ラシーヌの息子ルイ・ラシーヌは、その演目が『アンドロマック』だったと伝えているが⁽⁶⁾、いずれにしても女子生徒たちが世俗劇を見事に演じたことがきっかけで、マントノン夫人はラシーヌに恋愛ではなく、「敬虔と道徳とを主題にした、歌と語りが混ざった詩のようなもの⁽⁷⁾」の創作を依頼することになる。

『エステル』の功罪

王子たちがかつて身につけた衣装や宝石を身に纏い、サン＝シール女学院の生徒たちが煌びやかな姿で演じた『エステル』は、学校劇であるにもかかわらず、宮廷中の人々がこぞって見に来る「熱狂的⁽⁸⁾」になる。くわえて、映画『サン＝シール』では、第1幕5場の合唱隊による歌唱も再現されており、ラシーヌの『エステル』を特徴づける台詞と歌の融合を目の当たりにすることができて興味深い。

しかしながら、この成功は予想外の結果をもたらすことになる。女子生徒たちは、観客の好奇の目にさらされて、宮廷の青年たちからは演技を賞賛する手紙を受け取る。また、大勢の観客に拍手喝采された経験に酔いしれて、一部の生徒たちは学業に身が入らなくなってしまう。つまり学校劇『エステル』は、生徒たちを教化するどころか、サン＝シール女学院の風紀を乱し、生徒たちを女優にしてしまったのである。

『サン＝シール』の主人公たちもその影響を免れたわけではなかった。宮廷のひとりの青年が主役エステルを演じたリュシーに一目惚れし、リュシーに一目会おうとサン＝シール女学院に闖入する。アンヌの手引きにより面会が叶い、青年はリュシーに思いを告げるものの、リュシーからは全く相手にされない。この対応に逆上した青年は、リュシーを無理やり犯そうとするが、現場に通りがかった男に止められる。窮地に立たされた青年は男を殺害し、その場から逃亡する。

サン＝シール女学院の生徒たちには、演劇が必ずしも教育的でないことを思い知るマントノン夫人。敬虔な校風をなんとか取り戻そうと、サン＝シール女学院の教育方針のひとつであった自由闊達な議論を封印し、厳格主義者たちに指導を仰ぐことにする。先の殺人事件に煩悶していたリュシーは、無実であるとはいえ、殺人事件に関わっていることを聖職者のひとりに告解すると、改悛を命じられる。その求めに全身全霊で応えようとするあまり、心身ともに衰弱していくリュシー。一方アンヌは、リュシーを憔悴させた原因をつくったとってマントノン夫人を詰り、マントノン夫人の教育方針に疑問を呈することを憚らない。リュシーはそのまま息を引き取り、アンヌはサン＝シール女学院から脱走し、映画『サン＝シール』は幕が閉じる。

* * * * *

サン＝シール女学院での試みが画期的であったことは間違いない。しかし、イエズス会の学校に通う男子生徒とは異なり、女子生徒が当時、法曹家や聖職者になることはなかった。したがって、大勢を前にして堂々と話すスキルや、理路整然と説明し、相手を納得させる説得術は、サン＝シール女学院の生徒たちにはまったく必要なかったのである。楽しませながら教化するをモットーとするマントノン夫人の教育は、こうして失敗に終わる。『サン＝シール』の最後で、マントノン夫人がアンヌに昂然と反駁される姿は皮肉としか言いようがない。

ルイ14世の治世は終盤にかけて徐々に信心深くなっていく。映画『サン＝シール』で描かれるその移り行く世相もまた見物である。

注

- (1) Dangeau, *Journal* [in] Raymond Picard, *Nouveau Corpus racinianum*, centre national de la recherche scientifique, 1976, p. 230.
- (2) Madame de La Fayette, *Mémoires de la Cour de France* [in] *ibid.*, pp. 247-248.
- (3) Georges Forestier, *Jean Racine*, Gallimard, 2006, p. 688.
- (4) Jean Racine, « Préface », *Esther*, *Œuvres complètes*, éd. par Georges Forestier, Gallimard « bibliothèque de la Pléiade », 1999, p. 945.
- (5) *Ibid.*, pp.1676-1677.
- (6) Louis Racine, *Mémoires*, [in] *ibid.*, p. 1175.
- (7) *Ibid.*, p. 946.
- (8) *Ibid.*.